

古代都市バビロンとは

歴史上、バビロンほど魅惑的な都市はほかにない。その名はまさに、富やきらびやかさを彷彿とさせる。この都市に集まる金銀財宝は見事だった。これほど豊かな都市は、温暖で自然豊かな環境にあり、森林や鉱物などの天然資源に恵まれていたにちがいない、と考えたくもなるが、そうではない。バビロンは、ユーフラテス川ほとりの平らで乾燥した低地にあった。森林も鉱山もなければ、建造用の石もない。通商ルートですらなかった。降雨量も少なく、作物を育てられるような環境でもなかった。

バビロンは、使えるものはなんでも利用して大きな目標を達成する能力が人にはあることを示す、格好の例だ。この古代大都市を支えていたインフラも、その富も、すべて人が造ったのだ。

バビロンが利用できた天然資源はふたつだけ。豊かな土壌とユーフラテス川の水だ。当時はもちろん、いまでも世界有数と言える土木技術を用い、ダムや巨大な灌漑水路によってユーフラテス川の流れを変えていた。こうした水路を乾燥した低地に延々と巡らせることで、命を育む水を大量に注ぎ込んだのだ。これは史上初の大型土木工事と言われている。豊かな作物が収穫できていたのも、それまで世界のどこにもなかったこの灌漑のしくみのおかげだ。

幸い、バビロンは長期にわたって代々の王が統治していて、征服されたり略奪されたりすることはめつたになかった。交戦はたびたびあったものの、バビロンの財宝を狙って来た者に対する自衛の局地戦がほとんどだった。バビロンの優れた統治者たちがその名を歴史に残しているのは、その英知、進歩的な考え、正義のおかげだ。周辺国をことごとく征服して威厳を誇示しようと考えてる君主はひとりもいなかった。

都市としてのバビロンは、もはや存在しない。数千年間続いたこの都市を建設し、維持していた活気あふれる人々がいなくなると、たちまち廃墟と化した。バビロンがあった場所は、スエズ運河から東へ一〇〇〇キロメートルほど、ペルシア湾の北に位置する。北緯約三〇度で、アリゾナ州ユマとほぼ同じだ。気候もユマに似て、暑く、乾燥している。

かつて、多くの人口を抱える灌漑農業地域だったユーフラテス川ほとりのこの低地も、いまはまた、吹きさらしの乾いた荒地になっている。わずかばかりの草や低木が、吹きつける砂嵐に耐えながらかろうじて生えている。実り豊かな畑、巨大な都市、売り物をたっぷり積んだ隊商の列など、とうの昔に姿を消してしまった。アラブの遊牧民がわずかな家畜とともに

に質素に暮らしているほかには、住む人もいない。こうした状況が、西暦元年あたりからもうずつと続いている。

この低地一帯には土の小山が点在している。何世紀ものあいだ、このあたりを通る人たちは、ただの小さな山だと思っていた。それが考古学者からついに注目されるようになったのは、陶器やレンガの欠片が見つかったためだ。ごくたまにある激しい風雨に洗われて露出したのだ。欧米の博物館が資金を出し合い、遠征隊を送って発掘調査することになった。ツルハシやショベルでの発掘作業からまもなく、こうした小山が古代都市だったことが判明した。「都市の墓場」と呼ばれるのも無理はない。

バビロンもそうしたひとつだった。約二千年ものあいだ、この古代都市は砂漠の砂に吹きさらされていたのだ。もとはレンガだった壁という壁も粉々になり、ふたたび土に返ってしまっていた。それが、かつて豊かだった古代都市バビロンのいまの姿だ。土砂が大量に堆積し、これほど長いあいだ見捨てられていたため、その名さえも忘れ去られていた。長年堆積した土砂を丹念に取り除いていくことで、かつての街路、立派な神殿や宮殿が倒壊した残骸が現れて初めて、そうとわかったのだ。

この低地にあったバビロンその他の都市文明こそ、はっきりとした記録が残る最古の文明だと研究者の多くが考えている。明確な年代としては、八千年前までさかのぼれることがわかっていて、興味深いのは、時代を特定したその方法だ。バビロンの廃墟から、ある日食に関する記述が見つかり、そうした日食がバビロンから観測できた時代を現代の天文学者たちが直ちに算出して、当時の暦を現代の暦に換算したのだ。

こうして、バビロニアに住んでいたシュメール人が城壁都市を各地に建設して暮らしていたのは、今から八千年前、と判明したのだ。そのどのくらい前からこうした都市が存在していたのかは、推測するしかない。城壁都市の住民はただの未開人などではなかった。教養があり、開けた人々だった。記録によると、シュメール人こそ、土木技術、天文学、数学、金融、そして文字を最初に考え出した人々なのだ。

灌漑技術で乾燥低地を農業の楽園に変えたことは、すでに触れたとおり。当時の水路のほとんどが砂にすっかり埋もれてしまっているが、その名残りはいまもたどることができる。なかには、十二頭の馬を横一列に並べて通れるほど幅がある水路もある。コロラド州やユタ州の一番大きな運河にも匹敵する規模だ。

灌漑のほかにも、同様の大型工事を完成させていた。緻密なしくみで水はけをよくし、ユーフラテス川とチグリス川それぞれの河口にある広大な湿地を埋め立て、そこもまた耕地に変えていた。

古代ギリシアの旅行家で歴史家のヘロドトスが最盛期のバビロンを訪れ、外部の人間による唯一の記録を残してくれている。当時の街の様子、そこで暮らす人々の風変わりな習慣などを詳細に記している。このあたりの土壌の驚くべき肥沃さや、小麦や大麦の豊かな収穫量にも触れている。

バビロンの栄光は消えてなくなってしまったが、その英知はいまも失われていない。それは、当時の記録形態のおかげだ。はるか昔、紙はまだ発明されていなかった。そのかわり、粘土板に文字を丹念に刻みつけていたのだ。刻みつけられた粘土板は高熱で焼かれ、硬いかわらになった。縦横一五×二〇センチ、厚さ二・五センチほどある。

こうした粘土板がいまの書類のように用いられていた。そこに刻みつけられていたのは、言い伝え、詩、歴史、王様のお触れ、さまざまな規則、財産権、約束手形、それに、使者によつて遠く離れた都市に届けられた手紙までである。このおかげで、当時の人々の暮らしの細部までいろいろ知ることができる。たとえば、ある粘土板は、どこかの国の店の記録だとわかる。ある日付に、なんとかという名の客が持ち込む牛一頭を小麦七袋と交換、うち三袋はその場で手渡し、残り四袋は客の求めに応じて渡す、と記録されている。

廃墟と化した都市に埋まったまま保たれていたこのような粘土板が、考古学者たちによつて何十万枚と発見されている。

バビロンの数々の驚異のなかでも群を抜いているのが、この都市を取り囲んでいた巨大な城壁だ。すでに古代の人々が、エジプトの巨大ピラミッドとともに、「世界の七不思議」のひとつに数えている。バビロン建設初期に最初の城壁を建造したのは、セミラミス女王（バビロニア創建者ニノスの妻）とされているが、この最初の城壁の痕跡はまだなにも発見されておらず、その正確な高さもわかっていない。はるか昔の書物によれば、高さは推定一五〇一メートル、その外側は焼いたレンガで覆われ、深い濠がはりめぐらされていたという。

よく知られている後世の城壁は、紀元前六百年頃、ナボポラッサル王の時代に着工。この大がかりな再建計画後まもなく、王はその完成を見ることなく亡くなり、その息子、ネブカドネザル二世が引き継いだ。その名は旧約聖書でもおなじみだ（※バビロン捕囚など）。

後世に再建されたこの城壁は、高さも長さも驚異的だ。専門家によると、高さ五〇メートルほどで、十五階建てオフィスビルの高さに相当する。全長は推定一四〇一八キロメートル。厚みもかなりあり、この城壁の上で六頭だて馬車が走り回れたという。このとてつもない建造物もいまや、その基礎部分と濠の一部以外、ほとんどなにも残っていない。損壊だけでなく、アラブ人がどこかほかの建物に使うためにレンガを剥がして持ち去ったため、あとかたもなくなってしまったのだ。

このバビロンの城壁に挑もうと、征服戦争時代の名だたる征服者のほとんどが、次々と攻めてきた。バビロンを包囲した王は多いが、いずれも攻略できなかった。当時の侵略軍を侮ってはいけない。歴史家によると、騎兵隊一万人、二輪戦闘馬車二万五千台、一隊が千人の歩兵からなる千二百連隊。これだけの行軍に必要な軍需品や兵站基地を準備するのに二、三年はかかったはずだ。

古代都市バビロンは現代の都市とそう変わらない。街路があり、さまざまな店が立ち並び。行商人が住宅街を練り歩いて物を売る。神官が壮麗な神殿で儀式をとりおこなう。街のなかにはさらに城壁があり、王宮を取り囲んでいた。王宮の城壁は都市の外壁よりさらに高かったと言われている。

バビロンの人々はさまざまな技術に長けていた。彫刻、彩色、織物、金細工、金属製の武器や農具の製造もそうだ。宝石職人の手になる装飾品はとりわけ芸術的だった。そうした装飾品が富裕な人々の墓から多数発見され、世界の主な博物館に展示されている。

はるか昔、世界各地ではまだ石斧で木を切ったり、石の矢じりの弓矢で狩りや戦さをしてきた時代、バビロンの人々は、斧の刃も、槍の穂も、矢じりも、金属製のものを使っていた。

金融や商いにも優れていた。わかっているかぎり、交易手段としての貨幣、約束手形や財産権の記録を最初に考え出したのは、このバビロンの人々だという。

バビロンが敵に初めて攻め入られたのは、紀元前五四〇年頃。そのときも、街の城壁は攻略されなかった。バビロン陥落ほど珍しい話もない。当時、強大だった征服王キュロス二世が、バビロンを攻撃し、この難攻不落の城壁を突破したいと考えた。当時のバビロン王ナボニドスの側近たちは、包囲される前に戦うことを進言。だが、バビロン軍は負けて退散してしまった。こうして、開かれた城壁門からキュロス二世が入り、無血開城にいったのだ。

その後、バビロンの勢力や威信はしだいに衰え、数百年のうちにとうとう見捨てられ、住む人もいなくなった。風や砂嵐に吹きつけられ、その壮大な都市が建設される前のもとの乾いた荒地に帰してしまった。バビロンは滅び、ふたたび蘇ることはなかったが、この古代都市に現代文明が負うところは大きい。

バビロンがかつて誇った神殿の壁は、長い歳月のあいだに崩れ去ってしまったが、その英知は永遠だ。

お金は、この世の成功を計るものさし。

お金があれば、この世で享受できる最高のものを手に入れられる。

お金は、それを手に入れる単純な法則を理解している人には、ふんだんにある。

お金の法則は、バビロンに裕福な人々が大勢暮らしていた六千年前も、いまも、まったく変わらない。